

智頭往来の危険な渡しは 安全なコンクリート橋へ

かわはら ばし 河原橋



智頭往来は鳥取城下から千代川沿いに南下し、播磨・大阪・京都へ向かう主要な街道で、国道 53 号がほぼ引き継いでいます。城下を出た智頭往来は河原・用瀬・智頭を経由し志戸坂峠越えとなります。途中、千代川を横切るのが、「下の渡し」といわれた円通寺（河原町円通寺）の渡しと「上の渡し」といわれた渡一木（河原町一木）の渡しです。

下の渡しの川幅は 38 間（約 96 m）、深さ 8 尺（約 2.4 m）で、水が少なくなると渡し場の下流を歩いて渡っていたそうです。その後、胡麻土手あるいは布袋を経由して袋河原、河原を通り、往来は再び千代川を渡ります。ここが上の渡しです。渡一木の集落は、かつて千代川の東側にありましたが、洪水のたびに被害を受けるので、西の山端の現在地に移りました。渡し場は集落から 2 町東寄りでしたが、川の状況によって時に変わっていたものの河原橋からあまり離れていない場所だったそうです。

河原町はその名前が表すように、長年、洪水に悩まされ続けてきました。明治に入り、上の渡しに代わり木橋が架けられましたが、危険極まる橋だったようです。大正時代も同様で、洪水時になると木橋が危険なため「河原橋危険、通行禁止」と新聞で報じられるほどでした。そして、昭和 8 年（1933）8 月、志戸坂トンネルの開通を間近にひかえたこともあり、ようやく河原橋のコンクリート橋への架設工事が始まりました。

橋長 195.6 m、幅員 6.0 m の鉄筋コンクリート造・12 連・ゲルバー T 型桁橋の河原橋は、洪水や大雪に見舞われながらも 10 か月で完成し、竣工式には、県知事をはじめ各関係者、地元町長、地元小学生等が参列して、流されない橋の完成を喜びました。

この橋の特徴は、写真のように緩やかな曲線を連ねる灰色の桁と橋脚との支承部の美しさです。その後、東西両端部の拡幅に伴い親柱は撤去、高欄は強固なものに替えられました。下流側の歩道橋は昭和 47 年に架設されたものです。現在、河原橋は河原道路の完成により国道 53 号からはずれましたが、渡一木の生活道路としての役割を担っています。

■位置図



東西両端部を拡幅された河原橋の橋脚と桁の支承部



親柱を撤去し、高欄は強固なものに替えられた



河原城を背景に千代川に架かる河原橋



河原道路